

## ひとり遊びをしている幼児と他者の相互作用の変化

徳岡 大・前田健一

The change of interactions between preschool children who are engaged in non-social play and others

Masaru Tokuoka and Kenichi Maeda

非社会的遊びに従事する幼児は常にひとりで遊んでいるわけではなく、他者とかわることが先行研究(淡野・前田, 2006)で示されている。本研究では、非社会的遊びに従事する3歳児や4歳児と他者の相互作用について観察し、他者を幼児と保育者に分け、幼児同士の相互作用と保育者との相互作用別に検討した。その結果、3歳児では保育者との相互作用が幼児同士の相互作用よりも有意に多かった。非社会的遊びに従事する3歳児から開始された相互作用は、保育者との間では成立しやすいが、他児の間では成立しにくいことが示された。一方、4歳児では3歳児よりも幼児同士の相互作用が成立しやすいことが示された。発達に伴って非社会的遊びの変化をもたらす環境条件に相違があることが示唆された。

キーワード：非社会的遊び、自由遊び、幼児

### 問題

非社会的遊び(non-social play)とは、周囲に遊ぶことが可能な相手がいるにもかかわらず、社会的相互作用の見られない遊びと定義される(Coplan, 2000)。Luckey & Fabes (2006)は、非社会的遊び行動を非構成的(non-constructive)遊びや構成的(constructive)遊びからなるひとり遊び行動と、傍観(on-looking)行動や何もしない(unoccupied)行動からなる沈黙(reticent)行動に分類している。ひとり構成的遊びには、ブロック遊びやパズル、お絵描きのような探検遊びや創作遊びが含まれる(Coplan, Rubin, Fox, Calking, & Stewart, 1994)。ひとり非構成的遊びは、道具を使わない繰り返し感覚運動を表す(Coplan et al., 1994)。傍観行動は、自らは遊びには参加せず他児の遊びを見ていることを示し、何もしない行動は他児を観察する様子もなく何もしないでいることを表す(Coplan et al., 1994; Rubin, 1982)。

非社会的遊びの研究は、自由遊びの中でひとり遊びに従事する幼児とその社会的行動特徴や問題行動、不適応行動、親子関係、性格特性などの特徴との関連を明らかにすることを中心に行われてきた(Coplan & Rubin, 1998; Coplan et al, 1994; Luckey & Fabes, 2006; 大内・桜井, 2008; Rubin, 1982;

Spinrad, Eisenberg, Harris, Hanish, Fabes, Kupanoff, Ringwald, & Holmes, 2004; 淡野, 2009)。これらの研究によると、必ずしも全ての非社会的遊びが、不適応行動や問題行動と関連しないことが明らかとなっている (Coplan et al., 1994; 大内・桜井, 2008)。

淡野・前田 (2006) や淡野 (2008, 2009) の一連の研究は、自由遊び場面において非社会的遊びに従事する幼児の遊びの変化を観察している。その結果、非社会的遊びに従事する幼児の遊びは他者との相互作用に変化すること、その中でも構成的遊びに従事する幼児の場合には、自分から他者に働きかけることが有意に多いことが確認されている (淡野, 2008; 淡野・前田, 2006)。しかし、淡野 (2008) や淡野・前田 (2006) の研究では、非社会的遊びに従事する幼児以外を他者と定義しているため、保育者と他の幼児のどちらと相互作用が多いのか明らかにされていない。保育者と幼児では、年齢だけでなく、立場や役割が大きく異なる。そこで、本研究では非社会的遊びに従事する幼児と保育者および幼児と他児の相互作用を分けて、どちらが多いかを比較検討することにした。

ところで、幼児の遊びに関する従来の研究では、幼児の仲間に対する働きかけ方略に注目して、それと遊び場面との関連を検討している (松井, 2001; 松井・無藤・門山, 2001)。仲間に対する働きかけ方略は、自分の活動に相手を誘ったり、自分に相手を引きつけたりする方略と、自分から相手の活動へ働きかける方略とに分けて検討されている。その結果、松井他 (2001) では、幼児が遊びの中で他児とかかわる際に、自分の遊びを終わらせてから別の遊びを始めたり、あるいは自分の遊びに他児を引き込む行為が観察されるが、それらは発達段階に応じて変化することが示された (松井他, 2001)。この研究結果を参考にすると、非社会的遊びに従事する幼児の場合にも、他者 (他児や保育者) とかわる際に、同様の働きかけ方略の発達的变化が観察されるのではないかと考えられる。幼稚園に入園したばかりの3歳児にとって、保育者は他児よりも頼りやすい存在である。したがって、3歳児は保育者に対して働きかけたり、保育者の働きかけに応答することが多いと考えられる。それに対して、4歳児は3歳児よりも幼児同士の相互作用が多くなると考えられる。ただし、非社会的遊びに従事する4歳児の場合には、自分から他児に働きかけるよりも、他児からの働きかけに反応する機会が多いのではないかと予想される。以上の点を考慮して、本研究では非社会的遊びに従事する幼児と他者 (他児や保育者) との相互作用を年齢別に検討する。さらに、本研究では非社会的遊びに従事する幼児と他者との相互作用が、単なるあいさつなどの一時的な相互作用にとどまらず、お互いに共通の目的を持って協力して遊ぶような協同的な遊びに発展した事例を取り上げて、その特徴を記述する。

本研究では、松井他 (2001) を援用し、「他者との相互作用は、ある幼児がひとり以上の幼児と新たにかかわりを持つとし、言語的、非言語的を問わず、他者に向けられた働きかけが行われる場面であること」とする。さらに、本研究の働きかけとは、活動している幼児の集団に加わろうとする試みや、他の幼児を自分の活動へ誘い入れようとする試みだけでなく、あいさつや呼びかけのような一時的な相互作用なども含むものとする。なお、相互作用の成立とは、幼児からの働きかけに他者が応答した場合または他者からの働きかけに幼児が応答した場合と操作的に定義する。したがって、相互作用の不成立とは、幼児の働きかけに対して他者が応答しない場合、あるいは他者からの働きかけに対して幼児が応答しない場合である。

## 方法

### 対象児

東広島市内にある幼稚園で観察を行った。観察対象児は、3歳児1クラス、4歳児1クラスの幼児たちであった。5歳児クラスは、他者との相互作用を伴う遊びが多く確認されたため、本研究の観察対象から外した。

### 観察方法

淡野（2008）や淡野・前田（2006）と同様に観察の対象児を限定せず、非社会的遊びを行っている幼児が確認できたところで、その幼児の観察を開始するイベントサンプリング法を用いた。非社会的遊びを行っている幼児が他者と相互作用を開始した場合には、その相互作用が社会的遊びに変化するかどうかを確認するまで観察してから観察を終了した。観察者は、保育に参加しない「観察者」の立場を維持し、自由遊び場面の自然観察を行った。観察を開始する非社会的遊びの確認にあたっては、Luckey & Fabes（2006）の非社会的遊びの定義を参考した。

### 観察時期

3歳児、4歳児ともに2011年4月から2011年7月の間に1週間に1回の頻度で観察を行った。幼稚園の都合によって観察できない週もあり、最終的な観察回数は9回となった。1回の観察時間は約60分であった。その中で得られた観察記録を分析の対象とした。

## 結果

### 3歳児の相互作用における他児と保育者の比較

観察の結果、非社会的遊びに従事する3歳児が他者と相互作用を成立させた事例は45事例であり、相互作用の不成立は15事例であった。相互作用の開始者（自分、相手）と他者（他児、保育者）別に、相互作用の結果（成立、不成立）の事例数をTable 1に示す。

Table 1の事例数に基づいて、相互作用の開始者別に、他者が他児と保育者の間で、相互作用の結果に違いがみられるかを検討した。同様に、他者別に、相互作用の開始者が自分か相手かの中で、相互作用の結果に違いがみられるかを検討した。なお、観測度数5以下のセルが存在する場合、 $\chi^2$ 検定が不適切であるため、以下の検定ではFisherの正確確率検定を用いた。まず非社会的遊びに従事する3歳児からの働きかけによって相互作用が開始された事例数について、2（他者：他児、保育者）×2（結果：成立、不成立）のFisherの正確確率検定を行った（以下、全て両側検定）。その結果は有意であった（ $p = .001$ ）。そこで、相互作用の成立・不成立別に他児と保育者の間で比較した結果、相互作用の成立では有意差が確認され（ $p = .003$ ）、保育者が他児よりも有意に多かった。相互作用の不成立では有意傾向（ $p = .07$ ）となり、他児が保育者よりも多い傾向にあった。

次に、相手からの働きかけによって相互作用が開始された事例数について、2（他者：他児、保育者）×2（結果：成立、不成立）のFisherの正確確率検定を行った。しかし、その結果は有意でなかった（ $p = .21$ ）。さらに、相互作用の相手が他児である場合に限定して、2（開始者：自分、相手）

×2（結果：成立，不成立）の Fisher の正確確率検定を行った。しかし，その結果も有意でなかった ( $p = .23$ )。同様に，相互作用の相手が保育者である場合に限定して，2（開始者：自分，相手）×2（結果：成立，不成立）の Fisher の正確確率検定を行ったが，その結果も有意でなかった ( $p = .56$ )。

これらの結果から，非社会的遊びに従事する3歳児の場合，幼児から開始された相互作用の成立は相手が他児よりも保育者の場合に多いことが明らかになった。逆に，相互作用の不成立は，相手が保育者よりも他児の場合に多い傾向にあることが明らかになった。

Table 1  
非社会的遊びに従事する3歳児が他者と  
行った相互作用の回数

開始者	自分		相手	
	他児	保育者	他児	保育者
成立	4	19	9	13
不成立	7	1	5	2

#### 4歳児の相互作用における他児と保育者の比較

非社会的遊びに従事する4歳児の場合，他者との相互作用の成立は31事例であり，相互作用の不成立は5事例であった。相互作用の開始者と他者別に，相互作用の結果（成立，不成立）の事例数を Table 2 に示す。

3歳児の場合と同様に，相互作用の開始者別に，他者が他児か保育者かの中で，相互作用の結果に違いがみられるかを検討した。また，他者別に，相互作用の開始者が自分か相手かの中で，相互作用の結果に違いがみられるかを検討した。その結果，非社会的遊びに従事する4歳児からの働きかけによって開始された相互作用の事例数 ( $p = 1.00$ ) においても，相手からの働きかけによって開始された相互作用の事例数 ( $p = 1.00$ ) においても，2（他者：他児，保育者）×2（結果：成立，不成立）の Fisher の正確確率検定の結果は有意でなかった。また，相互作用の相手が他児の場合 ( $p = 1.00$ ) でも，保育者の場合 ( $p = 1.00$ ) でも，2（開始者：自分，相手）×2（結果：成立，不成立）の Fisher の正確確率検定の結果は有意でなかった。

Table 2  
非社会的遊びに従事する4歳児が他者と  
行った相互作用の回数

開始者	自分		相手	
	他児	保育者	他児	保育者
成立	13	3	10	5
不成立	2	1	1	1

#### 相互作用の成立事例に関する3歳児と4歳児の比較

Table 3 は，相互作用の開始者と他者別に，3歳児と4歳児の相互作用の成立事例数を示したものである。まず，非社会的遊びに従事する幼児からの働きかけによって開始された相互作用の事例数について，2（他者：他児，保育者）×2（年齢：3歳児，4歳児）の Fisher の正確確率検定を行った。

その結果は有意であった ( $p = .000$ )。そこで、年齢別に他者が他児か保育者かの間で比較した結果、3歳児 ( $p = .003$ ) でも、4歳児 ( $p = .02$ ) でも有意となった。Table 3 から分かるように、3歳児では相互作用の成立が他児よりも保育者との間で多いのに対して、4歳児では相互作用の成立が保育者よりも他児との間で有意に多かった。しかし、相手からの働きかけによって開始された相互作用の事例数では、2 (他者 : 他児, 保育者)  $\times$  2 (年齢 : 3歳児, 4歳児) の Fisher の正確確率検定の結果は有意でなかった ( $p = .18$ , 両側検定)。また、相互作用の相手が他児の場合 ( $p = .17$ ) でも、保育者の場合 ( $p = .43$ ) でも、2 (開始者 : 自分, 相手)  $\times$  2 (年齢 : 3歳児, 4歳児) の Fisher の正確確率検定の結果は有意でなかった。

これらの結果から、非社会的遊びに従事する3歳児では相手が他児よりも保育者の場合に相互作用が成立しやすいが、4歳児では相手が保育者よりも他児の場合に相互作用が成立しやすいことが明らかになった。

Table 3  
非社会的遊びに従事する3歳児と4歳児が  
他者と成立した相互作用の回数

開始者	自分		相手	
	他児	保育者	他児	保育者
3歳児	4	19	9	13
4歳児	13	3	10	5

### 非社会的遊びの変化の事例

非社会的遊びが他者との相互作用をきっかけとして他者と協力して遊ぶような協同的な遊びに発展した事例を以下に示す。

**事例 1 : 非社会的遊びの中に他児が参加して遊びが変化** 女児 (C1) が、畳のスペースで、お皿に食玩を盛りつけておままごと遊びをしている。男児 (B1) が近くでマントをつけようとしていたが、うまく付けられない。B1 は、マントを付けることを諦める。そして、畳のスペースに入って C1 に話しかける。すると、C1 が皿と湯のみを机にセットし、B1 はポットをコンロの火にかける。B1 は、「チーン」と言う前からポットの中身を C1 がセットした湯のみに注ぐようにする。

**事例 2 : 非社会的遊びから別の遊びに参加することでの変化** 男児 (C2) が、一人乗りの 2 輪車を乗り回し、何度も水たまりの上を通過する。しばらく同じような繰り返した後で、2 輪車を乗り捨てて。そして、大きいスコップを持って砂場に移動する。砂場では、幼児が何人か並んで一人ずつ水道の蛇口から出る水をスコップで受けて砂場に水を撒いている。C2 は、その列に並び順番がくると水をすくって砂場に水を撒く。

**事例 3 : 保育者が別の遊びに巻き込むことでの変化** 男児 (C3) が、山のステージのようなところで土を掘ったり、掘ったところに水を入れたりする。少しすると、あたりをふらふらと歩き、他児の後を追うようにうろうろするが相手にされない。近くにいた T1 (保育者) の後を追っていく。T1 は鬼ごっこに参加するところで、鬼ごっこが始まると T1 は隠れるときに近くにいた C3 を誘って一緒に隠れる。また、T1 が鬼になったときには、C3 と手をつないで鬼の役割を一緒にする。

## 考察

本研究では、非社会的なひとり遊びをしている幼児が他者と相互作用するように変化するプロセスを観察し、相互作用の開始者、他者が他児か保育者か、および発達の観点から比較検討した。すなわち、自由遊び場面において非社会的遊びに従事している幼児が他者と相互作用するように変化する場合、自分から他者との相互作用を開始するのか、あるいは他者から相互作用が開始されるのかについて、他者を他児と保育者に分けて比較検討した。その結果、3歳児では、他児との間よりも保育者との間で相互作用が成立しやすいことが明らかになった。また、非社会的遊びに従事する幼児から開始した相互作用の成立事例を3歳児と4歳児間で比較した結果、3歳児では保育者との間が他児との間よりも有意に多かったが、反対に4歳児では他児との間が保育者との間よりも有意に多いことが明らかになった。これらの結果は、非社会的遊びから他者と相互作用する遊びへと変化するプロセスが幼児の発達段階によって異なり、発達に伴って保育者との相互作用から他児との相互作用へと変化していくことを示唆する。

非社会的遊びに従事する3歳児から働きかけを開始して相互作用が成立した事例では、保育者との相互作用が他児との相互作用よりも有意に多かった。非社会的遊びに従事する幼児は社会的スキルの発達が低いという指摘（大内・桜井，2008）を考慮すると、非社会的遊びに従事する3歳児が社会的スキルに乏しい働きかけを示したときに、保育者はそれとうまく対応できるので、保育者との相互作用が成立しやすいと考えられる。それに対して、同年齢の他児は非社会的遊びに従事する3歳児の社会的スキルに乏しい働きかけに対して、うまく対応できないので、他児との相互作用が成立しにくいのではないかと考えられる。このように考えると、保育者が幼児からの働きかけにうまく対応し、他児との相互作用を仲介していく保育のやり方が、非社会的遊びに従事しやすい3歳児の相互作用を増やすのに有効ではないかと示唆される。

相互作用の不成立に注目すると、非社会的遊びに従事する3歳児から開始した他児に対する働きかけは、保育者に対する働きかけよりも不成立な結果に終わる場合が多かった。しかし、4歳児になると、相互作用の不成立は急減し、相手が他児か保育者か間に有意差はみられなくなった。松井（2001）や松井他（2001）は幼児同士の相互作用の開始方略が発達的に変化するを見出している。本研究の結果から、非社会的遊びに従事しやすい幼児の場合にも同様に、幼児は発達につれて他児との相互作用が成立しやすいように仲間に対する働きかけ方略を変化させる可能性が示唆される。

最後に、今後の課題として、3歳児から4歳児にかけて他児との相互作用が不成立の事例が急減する理由を明らかにすることが求められる。非社会的遊びに従事する幼児から他児への働きかけは、4歳児ではほとんど成立しているのに対して、3歳児ではあまり成立していない。この結果は、3歳児と4歳児で使用される働きかけ方略が異なることに起因するのか、あるいは非社会的遊びに従事する幼児だけでなく、幼児と相互作用する他児の社会的スキルも低いことに起因するのかを明らかにする必要がある。特に、非社会的遊びに従事しやすい幼児や他児の相互作用の開始方略が、松井（2001）や松井他（2001）で確認された幼児同士の遊びの相互作用の開始方略とどのように異なる

かを明らかにすることは、非社会的遊びに従事する幼児に対する有用な介入指導法の開発につながると考えられる。

#### 引用文献

- Coplan, R. J. (2000). *Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches*. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund, & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed., pp. 563 - 598). New York: Wiley.
- Coplan, R. J., & Rubin, K. H. (1998). Exploring and assessing nonsocial play in the preschool: The development and validation of the preschool play behavior scale. *Social Development, 7*, 72 - 91.
- Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, playing alone, and acting alone: Distinguishing among reticence and passive and acting solitude in young children. *Child Development, 65*, 129 - 137.
- Luckey, A. J., & Fabes, R. A. (2006). Understanding nonsocial play in childhood. *Early Childhood Education Journal, 33*, 67 - 72.
- 松井愛奈 (2001). 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連. 教育心理学研究, **49**, 285- 294.
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦 (2001). 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討. 発達心理学研究, **12**, 195 - 205.
- 大内昌子・櫻井茂男 (2008). 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討. 教育心理学研究, **56**, 367 - 388.
- Rubin, K. H. (1982). Nonsocial play in preschoolers: Necessarily evil? *Child Development, 53*, 651- 657.
- Spinrad, T. L., Eisenberg, N., Harris, E., Hanish, L., Fabes, R. A., Kupanoff, K., Ringwald, S., & Holmes, J. (2004). The relation of children's everyday nonsocial peer play behavior to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology, 40*, 67 - 80.
- 淡野将太 (2009). ひとりで遊んでいる子どもの社会的行動特徴—静的遊びについて—. 発達研究, **23**, 107 - 114.
- 淡野将太 (2008). ひとりで遊んでいる子どもはどのように遊びを変化させるのか?—自由遊び場面における非社会的遊びの変化プロセス—. 発達研究, **22**, 263 - 270.
- 淡野将太・前田健一 (2006). 自由遊び場面における幼児の非社会的遊びの変化. 広島大学心理学研究, **6**, 249 - 255.